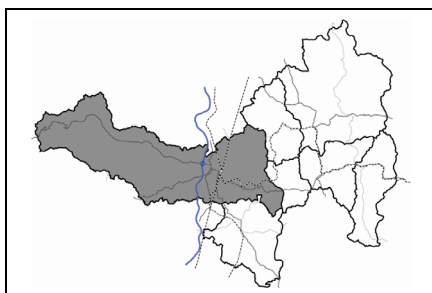


5-3 地域ごとの景観まちづくり方針



一関地域

「活力ある都市と自然・歴史文化が 調和する広域拠点の景観づくり」

活力ある都市の景観を創出する

盛岡都市圏と仙台都市圏並びに太平洋と日本海を結ぶ交通の要衝となっている地域であり、特に一ノ関駅及び一関インターチェンジは市の「顔」としての役割を持っている。しかしながら、一ノ関駅周辺やインターチェンジ、幹線道路沿いに設置された煩雑化した看板類をはじめ、中心市街地の空き店舗の増加や歩行者通行量の減少など、市の玄関口・顔としての魅力を阻害する要因も多い。このようなことから、世界遺産登録を目指している都市として、観光客や来訪者を迎えるにふさわしい景観づくりを進め、岩手県南・宮城県北の中核都市としてふさわしい活力ある都市景観の創出に努める。

自然と調和した景観づくりを進める

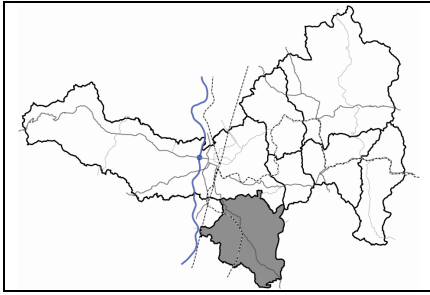
いたるところから須川岳が眺望できるほか、ランドマーク※となっている釣山や蘭梅山、自鏡山や烏兎ヶ森などの独立峰は、山頂や山麓からの眺望の良さから地域住民に親しまれた存在となっている。また、須川岳に源を発する磐井川は、景勝地として名高い名勝・天然記念物の巖美溪を形成するほか、市街地では河川公園として活用され、北上川との合流点は一関遊水地として河川を軸とした水田パノラマ※景観を形成するなど、地域の景観を構成する重要な要素となっている。このほか、尾花が森、機織山等の市街地周辺の斜面樹林が市街地を囲む緑辺部の景観を構成している。

潤いのある都市景観の創出にあたっては、このような特徴的な周辺部の自然景観と調和した景観づくりを進める。

歴史文化と調和した景観を保全・継承・活用する

一関地域は、世界遺産登録を目指している骨寺村荘園遺跡をはじめとする多くの歴史文化資源が残されている。また、教育、文化を尊ぶ伝統が藩政時代より根付き、多くの優れた人材を輩出している。

文化財等の保護や郷土の先覚者を顕彰する「先賢の路」の整備など、有形・無形含めた様々な歴史文化資源の保全・継承を進めてきているところである。歴史文化資源と周辺地域の景観との調和を図るとともに、古くから地域に根つき親しまれてきた寺社や近代建築、古い言い伝えのある旧跡を活用した街並み景観の整備・創出を図る。



花泉地域

「花と泉の潤いと

活力みなぎる田園の景観づくり」

花と泉の豊かなまちをつくる

川沿いに広がる広大な田園風景が地域の特徴であり、その両端にまち場や農村集落が連なり県境を越えた広大な広がりを感じさせる農村風景が目を引く。さらに、そのなかに点在する白鳥の飛来地である蒲沢ため池をはじめとする三千を超す溜池が彩りを添え、地域の東端を流れる北上川、中央を貫流する金流川、北の丘陵地を流れ北上川に注ぐ刈生沢溪流、さらには県境をゆっくり流れ迫川に注ぐ夏川などの流れが特徴的な景観資源となっている。これらが織りなす花泉の景観は地域の顔であり、保全しつつ地域の特徴的なまちづくりへの活用を図る。

また、花泉地域最大の交流空間である花と泉の公園は、春のぼたん祭りをはじめとして人々が集う憩いの場であり、その他の公園とともに良好な維持・管理を図るほか、里やまち場の植樹・植栽などの緑化を促進し、「花」に象徴される地域のイメージに即した潤いのある景観づくりを進める。

快適で美しいまち場の景観をつくる

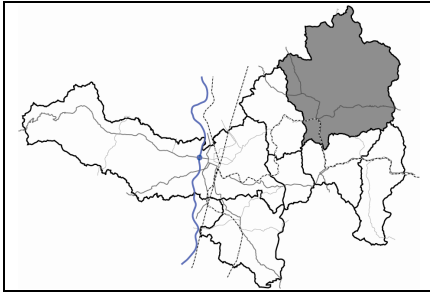
比較的新しい花泉駅周辺地区や古い町並みの涌津、藩政時代の歴史を醸し出す金沢のまち場では、空き店舗や空き家が増加しており、景観を損ねるだけではなく、環境や地域防災の面からも開発・整備に対する配慮が必要である。また、地域内道路や下水道などの生活環境の整備とあわせて、街並みや周辺環境に即した景観上の配慮に努めるとともに、環境美化の取り組みを充実させ、それぞれが持つ歴史的な特徴を生かした快適なまち場の景観を創出する。

眺望景観と農村景観を保全する

花泉地域は、金流川沿いに広がる平地と緩やかな丘陵地により構成されている。広がりのある田園空間とそれに続く集落を抱いた里山のコントラスト*は市内でも特徴ある眺望景観となっている。さらに夏川流域は、宮城県との県境を成しているが、高台からは一面に広がる田園風景が遠望される。

また、金沢の丘陵地に広がる水田地帯は、幾重にも連なる幾何学的な模様が独特な眺望景観となっている。さらにこの地からは、晴れた日には四季折々の須川岳を遠望することが出来るのも大きな特徴である。

これらは、花泉地域に見られる景観資源であり、適切な保全に努める。



大東地域

「蔵街道と祭りの映える

室蓬讓水の里の景観づくり」

室蓬讓水の景観を保全する

東に室根山、西に蓬莱山を望み、砂鉄川や猿沢川などの清流に抱かれて、譲り合いながら脈々と流れるがごとき室蓬讓水の里づくりが、大東地域の変わらぬ里づくりの理念である。

ふもとから見上げる山並み景観や、山頂等から見おろす広がりのある眺望景観、とその周辺の田園景観や水質の浄化などについて、様々な取り組みの連携の中で地域住民と行政が協働して、豊かな自然景観の保全・整備及び継承を図る取り組みを進める。

蔵のある家並み・街並みを保全し活用する

大原地区や猿沢地区、摺沢地区の街なかでは、かつての商業町や宿場町として栄えた面影を残す蔵造りの商家や民家が今も多く残されており、落ち着いた街並み景観を呈している。

蔵の街並みは地域の歴史と往時の賑わいを今に伝えるシンボリック*な景観として、価値を再認識し、できるだけ保存を図る。

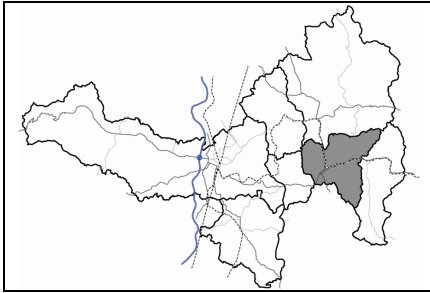
大東大原水かけ祭りをはじめとする伝統ある祭りの背景として、また地域の活性化の資源として積極的にアピールし、交流人口の増加につながる効果的な活用を図る。

特徴的な里の風景をつくる

大東地域の特徴的な農村集落形態としては、イグネ*に囲まれた農家が山裾を中心に分散立地し、屋敷周りには水田や畑が張り付いている。

農家住宅は伝統的な構えの荘厳なものが多く、広がりのある自然景観と一体となって、落ち着きと安らぎのある農村景観を呈している。

建築物の建築等にあたっては、こうした故郷の景観の維持保全に配慮するとともに、里の沿道空間にあっては、地域ぐるみの清掃や花の植栽などの環境美化活動を通じ、景観阻害要因の除去と魅力のある里づくりを進め、特徴的な里の景観を守り育てる。



千厩地域

「街道と歴史・自然が調和する

交流拠点の景観づくり」

歴史的文化資源のある街なか景観を保全する

千厩の名が表すとおり、かつて名高い馬産地だったこの地域は、多くの金山を持つ産金の地として古くから栄え、東磐井地方の葉タバコと養蚕の交易の町としてその賑わいと繁栄を築き上げてきた。

その足跡は、歴史に残る源義経の愛馬「太夫黒」の産地の話しや、金山一揆などが今日に語り継がれていることと、現存する葉タバコ神社、旧専売局千厩煙草専売所の建物などから探ることが出来る。

このように千厩市街地には商店街を周回するように歴史的文化的な建築物や神社・石碑等が多く点在している。

これらの資源は、祭りや伝統行事、郷土芸能と共に住民に支えられ、街の中心を流れる千厩川を挟んで金山一揆集結の地としても有名な松沢神社や千厩城跡地の館山公園と調和して、ふるさとのロマンが漂っている。

このようなかつての賑わいと物語が回顧できる豊かな歴史的文化資源の景観を歴史的まちなみ再生のシンボルとして保全する。

山と丘陵地の景観を守り、活用する

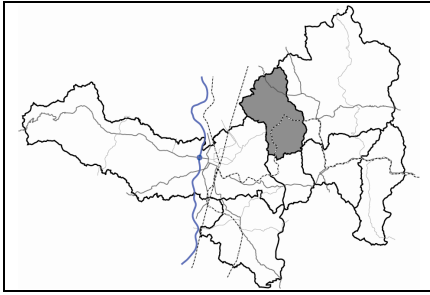
三島山や黄金山、京ノ森山、迦陵頻伽の丘などの小高い山々や丘陵地は、千厩地域を囲む特徴的な緑地景観としてその自然景観を大切に保全する。

また、これらの山腹や山頂からの周辺山々や市街地への眺望が悪くなってきていることからその保全と改善を図ると同時に、丘陵地にある水と緑に恵まれたキャンプ場や森林公園などをレクリエーションなど交流の場として活用する。

広がりのあるふるさとの風景を継承する

千厩地域は、気仙沼街道沿いの東西に市街地が展開しており、その南北には室根山と黄金山をランドマーク※とした緩やかな丘陵地の広がりのある農村集落景観が形成されている。その景観の特徴は、里山に抱かれたイグネ※のある農家住宅景観、奥玉地区の広がりのある水田景観、千厩川の支流に沿って開ける農用地と集落から感じ取ることが出来る。

これらの広がりのある、ゆったりとしたふるさとの風景を集落営農をはじめとする農業の振興と花いっぱい運動などの地域住民活動を軸にして保全して歴史文化と共に継承する。



東山地域

「自然の恵みと文化が調和する

観光拠点の景観づくり」

渓谷と河川の景観を守り、活用する

東山地域は、その地形・地層の特性から名勝狛鼻溪や三億五千万年前の化石が発見された鍾乳洞幽玄洞など、石灰岩質の地層が侵食されて出来た景勝地が有り、毎年多くの観光客が訪れている。特に、狛鼻溪は日本百景にも選ばれ、渓谷の間を抜ける舟上からの景観は、清流の澄み切った流れと共に四季折々の自然美を醸し出している。

地域のもつ特徴的な地形・地質から生まれた渓谷美は、東山らしい景観の代表的な資源であり、今後ともその保全に努めるとともに砂鉄川の水質および景観の保全・向上の取り組みを推進し、渓谷景観と周辺地域の景観との調和や、観光名所としてふさわしい景観整備を進め、観光拠点としてのさらなる活用を図る。

元気のある市街地景観づくりを進める

長坂地区は東山地域の中心となる市街地であるが、現在は店舗以外の建物も多くなり、昔の商店街の賑わいが失われつつある。狛鼻溪への玄関口にもあたり、地区を取り囲む砂鉄川や周辺施設との連携等、中心商業地としてふさわしい景観形成の再生を図る。

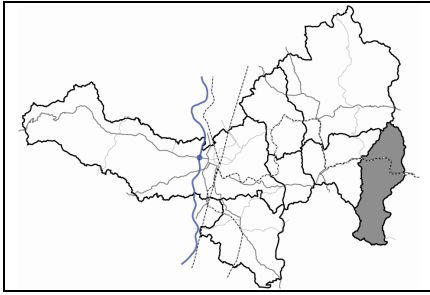
また、松川地区は昔、酒造りが盛んだった地区であり、多くの土蔵が残っていることから地区の街並み景観の維持・保全を図ると共に、地域の歴史資産でもある二十五菩薩堂や新奥の細道などの資源と一体的な活用の促進を図る。

産業や歴史文化と調和させつつ自然景観を保全する

東山地域は石灰資源が豊富なことから、セメント工場や石灰関連産業と共に歩んできた。このことにより、原料である石灰岩の採掘場の景観は他の地域には無い特徴的な景観となっており、周りの山林等の自然景観との調和に努める。

また、菅公夫人の墓、宗松寺の参道杉並木、二十五菩薩堂、さらに宮沢賢治にゆかりのある、近代文化遺産に登録されている東北砕石工場など、多くの歴史的、文化的資源の活用を図ると共に周辺景観との調和を誘導する。藤原時代の故事に倣い、地域住民が主体となって行われ、毎年正月行事として定着した磐井清水の若水送り、豊臣秀吉の小田原参陣の可否を協議した唐梅館絵巻等、地域固有の文化を伝える一景観として継承を図る。

さらに、東稲山や唐梅館山、丈競山（たけくらべ）等の山並み眺望やこれらの山頂からの北上川、砂鉄川の眺めを含む自然景観の保全に努める。



室根地域

「室根山と祭りの映える

安らぎのある里の景観づくり」

室根山をはじめとする山々の景観を守る

室根山の壮大なたたずまいは、室根地域だけでなく本市及び周辺都市のシンボルとなっており、豊かな自然に包まれ、春は桜、初夏のツツジ、秋の紅葉など四季おりおりの姿で里人の眼を楽しませてくれる。その景観の保全は、室根地域においてもっとも重要な取り組みといえる。また、矢越山や大森山などの山並みについても、地域住民に親しまれる景観資源となっており、これらの山々の景観及び山頂山腹からのパノラマ*景観の保全に努め、後世に継承していく。

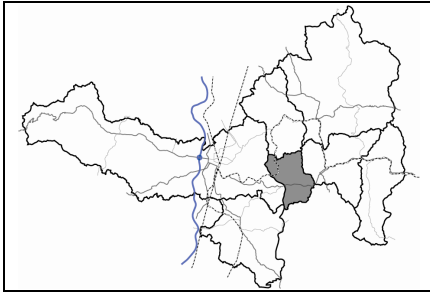
祭りと調和する歴史的景観を演出する

室根山の八合目には古くからの信仰対象である室根神社があり、その特別大祭の「マツリバ行事」は、東北三大荒祭りの一つとして、国の重要無形民俗文化財に指定されている。神社を勧請した養老2年（718年）を記念し旧暦閏年の翌年に実施するこの祭りは恒常的に望見できるものではないが、人々の心に根ざしたかけがえない景観であり、室根地域固有の伝統文化を今に伝えるものである。このような祭り景観の保全と継承を図るとともに、祭りと調和するまち場や里の景観づくりを進める。

地域の取り組みを生かした特徴的な里づくり

私たちの暮らしは、縄文の昔から自然を共に生きるものとしてとらえる木の文化、森の文化そして川の文化が脈々と受け継がれ、環境と共生する歴史的素地を持っており、里山を背景とした農村集落や農地の風景は、懐かしさとやさしさを感じる本市の美しい里の風景といえる。室根地域では、随所にイグネ*のある農家住宅などが残されており、これらの風景の保全に努める。

大川が注ぐ宮城県唐桑の漁師達が、豊かな海は豊かな森林から生まれるという理念のもとに室根の地に木を植え、両地域が手を携えて育ててきた広葉樹の森「ひこばえの森」は、20年を経て大きく成長しようとしており「森は海の恋人」運動は全国的な広がりを見せている。この植樹の取り組みや、津谷川沿いの「ホタルの里」や「かつかの棲む里」、サケの放流など、地域の取り組みを生かした特徴的な里の景観づくりを進める。



川崎地域

「川の恵みと歴史が調和する

ふるさとの景観づくり」

親しみのある河川空間の景観を守り、活用する

悠久の北上川の流れと、これにそそぐ砂鉄川、千厩川によってもたらされてきた自然の恵みや、水害などの脅威との関わりの中で、川崎地域の景観は創られてきた。

北上川の舟運時代の終焉とともに、人々は川から遠ざかっていたが、生活に欠かせない水に着目し、川や水辺を親しみのある空間として保全し、再び活用していくため、川を中心とした交流の場となる「川の駅」の創出が、川崎地域のふるさとづくりの理念である。

そのため、川や水辺を遊びの場、教育の場、癒しの場、観光資源などとして、心地よく多くの人々に利用してもらえるよう、地域住民、NPO*法人等の各種団体、行政が協働して景観や生態系環境の保全に努め、さらなる活用を行う。

活気ある交流拠点の景観を創出する

北上川の舟運時代、現在の諏訪前地区は、水路と陸路を結ぶ宿場町として栄えた歴史があり、各地から集まる物資や人とともに、情報が行き交い、大いに賑わう「駅」であった。物資輸送の中心が、水路から鉄道、自動車に移り変わるとともに、かつての宿場町は衰退していったが、国道 284 号薄衣バイパスの開通とともに、「道の駅・かわさき」を中心に市街地が形成され、新しい「駅」の機能を回復している。

川崎地域では、薄衣バイパス周辺の新しい市街地形成に先立ち、中心部エリア景観形成構想をまとめ、舟運時代の宿場町を基調とした建物の建築様式と色彩を示して公共施設を整備し、民間建築物にも協力を求めてきた。

交流人口の拡大を図るため、引き続き、活気ある交流拠点の景観の創出を進める。

歴史と暮らしが調和する鄙（ひな）の景観を保全する

石蔵山や高鳥兎山に代表される小高い丘陵は、眺望点であるとともに目印となるランドマーク*でもあり、薄衣城址や川崎の柵跡、岩手県最古の「建長の碑」といった文化財や、岩手県指定天然記念物「薄衣の笠マツ」などが、人々の暮らしと調和しながら、鄙の景観を醸し出している。

鄙の景観を美しく保つため、これら景観対象物への案内表示板の印象統一、地域と行政が一体となってアクセス道路や周辺農用地等の適性管理を進めるとともに、歴史と暮らしが調和する地域景観の保全を図る。

